

どうぶつ園のじゅうい 京都市動物園紹介編（画像）

1. 京都市動物園の正面エントランス

京都市動物園に獣医師は7名います。動物の治療を担当している獣医師は安全管理・病院係長を含め4名で、その他は副園長、種の保存展示課長、生き物・学び・研究センター研究教育係長として、動物園の運営に携わっています。

京都市動物園では、約130種類600点(平成29年)の動物を飼育しています。

なお、動物園には、獣医師の他に園長、総務課職員6名、種の保存展示課職員32名、野生鳥獣救護センター職員2名、生き物・学び・研究センター職員4名が勤務しています。

2. 管理事務所

本園の管理事務所は1フロアになっており、その日の出勤者で毎朝8時30分に全体ミーティングを行い、その日の予定を確認します。

3. 管理事務所

全体ミーティングのあと、獣医師のミーティングを行います。

4. また、動物園は飼育動物の「命」を預かっていますので、職員は交代で365日、動物の世話をしています。そのため、勤務日が入れ替わりになることも多いので、日々の診療などを翌日の獣医師に伝達するメモを残しています。

5. その日の仕事の打ち合わせを終えたら、動物たちの朝の様子を観察しに行きます。新人獣医師は先輩獣医師から、観察のポイントを学びます。

6. また、先輩獣医師の治療にも同行し、その技術を学んでいきます。

7. 動物の健康を維持する上で大切なもののひとつは食べ物です。

8. 動物たちは、それぞれの生活にあった食べ物を食べています。動物園では約80種類の餌から、それぞれの動物にあった食べ物を与えています。その餌をしっかりと食べているか？残していないか？も確認します。餌を残しているようだと体調が悪い可能性があるからです。そして、食べ物を食べたら当然ウンチをします。そのウンチの状態も確認しています。ちゃんと消化管が働いていると良いウンチが出来るからです。よいウンチをしていない時は、その原因を見つけて治してあげる必要があります。動物によってウンチの形もさまざまで、それらをしっかりと観察します。

9. ところで、数が多い動物をどうやって見分けているか分かりますか？きちんと見分けられないと、誰が調子が悪いか分からないですよ？

動物園では、見た目や顔、体の模様などで見分けていますが、それでも見分けづらいことがあるので、脚環（きゃっかん）や翼帯（よくたい）と呼ばれる色の名札を付けて見分けています。また、マイクロチップと呼ばれる世界にひとつだけの番号を記録したものを体内に埋め込むこともしています。

10. 色の使い方は、0～9までの色分けをして、左脚（左翼）が10の位、右脚（右翼）が1の位で1～99までの識別が可能になります。

素材はお湯につけると軟らかくなり、冷めると硬くなる硬質塩ビ板やインシュロック（ケーブルタイとも呼ばれる）などを使っています。当然、ゆるかったりきつかったりしないように鳥の脚の太さに合わせて形を作っています。
11. ここは、動物園にある病院の診察室の入口です。
12. 中央に処置台があり、その周りには治療や検査に使う器具類がたくさんあります。ここでは、小型から中型の動物の調子が悪い時に治療を行います。これは、ウサギの治療を行っているところです。ちなみに歯のかみ合わせを治療しています。
13. 動物園には、哺乳類だけではなく、鳥類・爬虫類・両生類・魚類を飼育しており、それらの治療も行います。
14. 栄養状態が悪い時には、点滴やミルクを与えるなどエネルギーを維持しながら治療を進めます。写真はケープハイラックスです。
15. 診察室に運べない場合は、動物舎で処置をします。

ここはもうじゅうワールド・ライオン舎で、ライオンの処置をしているところです。
16. こちらは、類人猿舎でチンパンジーの超音波検査（エコー検査）をしているところです。
17. ここは、検査室です。血液を検査するための器具があり、数値化して健康状態を診断します。
18. その他に顕微鏡もあり、血液中の赤血球・白血球の比率を調べたり、糞便中の寄生虫を調べたりします。
19. 左がゾウ、右がクマタカの血球です。鳥類の赤血球には核があります。感染症に罹患すると白血球の数が増えます。
20. 寄生虫は下痢の原因になったり、かゆくなったりします。そして、種類を確認して、その虫に合う薬を使って治療します。きちんと合った薬を使わないと治りません。

左上はハウシャガメ、右上はミドリニシキヘビ、下はタヌキでみつかった寄生虫です。
21. 寄生虫にも多くの種類があるので、その形や大きさなどの特徴で見分けていきます。左上と右上はウサギ、下はチンパンジーで見つかった寄生虫です。
22. ここは薬品庫です。

症状や原因の対処として適切な医薬品を選択し、処方しています。

23. また、病室もあり、治療のために入院させる動物を収容します。
24. ただし、病気ではないケースでも使用します。例えばペンギンが落ち着いてヒナを育てやすい環境にするためや動物の搬出前などにも使用します。
25. 病気を予防するのも大切で、そのために定期的に健康診断をしています。写真はフラミンゴの集団検診の様子です。
26. ただし、獣医師の仕事は動物の健康管理だけではありません。おとぎの国のふれあいプログラム「なかよし教室」も担当しています。ウサギやテンジクネズミについて説明し、参加者にふれあってもらっています。
27. また、おとぎの国のふれあいグラウンドでもふれあいのお手伝いをしています。
28. その他に、「バックヤードツアー」というイベントで来園者に診療室を案内したり
29. 講演活動や遠隔授業も実施しており、生き物・学び・研究センターの獣医師が担当しています。
30. 京都市動物園の場合、飼育動物だけではなく、京都府から委託を受けている、野生鳥獣救護センターに運び込まれてくる鳥獣の診療も行っています。
31. ここは、非公開施設であり、ペットや有害鳥獣駆除動物（ドバト、カラス、ヒヨドリ、サル、シカ、イノシシなど）は対象としていません。
32. 通常は非公開ですが、教育普及活動の一環で、救護センターの紹介をすることもあります。
33. 傷病鳥獣が持ち込まれた際には診察し、必要な処置を行います。診察では、脚の機能不全が認められたため、
34. まずは、レントゲン検査で状態を確認します。この際、防護衣を着用し、被爆しないように気をつけています。そして、さまざまな情報を精査し、治療方針を決めます。野生鳥獣救護センターに運び込まれてくる鳥獣はあくまでも野生であり、自然復帰させることを第一の目標とします。
35. ただし、「いのち」ある動物を飼育している限り、必ず死はやってきます。
36. そして、亡くなった場合は、その原因を究明し、生きている動物たちの飼育管理に生かしていくことが大切です。
37. そのため、剖検とよばれる死因を調べるための解剖を行います。

飼育動物であれば、飼育担当者と一緒に行くこともあります。

38. また、解剖することで、動物の食性による消化管の違いなどを確認することもできます。ちなみに、左上：ジャガー，左下：ハウシャガメ，右上：ヒドリガモ，右下：テンジクネズミです。
39. 解剖室には冷凍庫があり，剖検を終えた動物たちを一時保管しておきます。その後，京都市中央斎場の動物炉で火葬します。
40. 日々の飼育で得られた情報は，飼育員による飼育日誌として記録されるとともに，
41. 治療の記録や剖検で得られた情報は，獣医師により診療日誌としても記録され，動物の未来のために役立てられ，後進の育成にも活用します。
42. また，いくつかの動物舎には監視カメラが設置されており，必要に応じて映像データも確認しています。これは，キリンの出産を確認しているところです。
43. 最後に，体を洗ってから帰ります。動物から人に，人から動物にうつる病気は少なくありません。日中は，動物舎への出入りの際に長靴を消毒していますし，マスク・手袋の着用や手洗いなどの衛生管理にも，常日頃から気をつけています。
44. さて，京都市動物園での獣医師の仕事は分かりましたでしょうか？
治療・検査・解剖・記録以外にも多くの仕事があります。動物園の運営についてやテレビ・新聞・雑誌などの取材対応，施設整備や安全対策に係る取組等です。
今度来られるときは，ちょっと違った見方が出来るかもしれませんね。動物園では毎週末いろいろな催し物を企画していますので，動物園をいっぱい活用してください。